

はじめに

本書は、国際関係論・国際政治学の初学者向けの教科書である。四十代の研究者がひとりで書いたもので、当然「まだまだ」の部分がある。しかし以下にあげる複数のオリジナリティがあり、粗削りであることを自覚しつつも、世に出して是非を問いたいと思う。

第1に、本書は、国際政治経済が戦争や安全保障に先んじて説明されるべきだと理解する。これは、国家間の協力から生まれる経済的相互依存が国際関係の本流であるにとらえているためである。経済的な関係をうまく維持・制御できれば国際関係は通常、平和である。経済的な国際関係が何らかの理由で破綻することで戦争が起こりやすくなるというのが本書の考え方である。なお、戦争は、言うまでもないが多様な原因によって起こるもので、著者は経済的要因だけが戦争原因だなどと主張していないことに注意してほしい。

第2に、本書は、自分の意思決定やその結果が他者の意思決定に依存することに特徴づけられる戦略的相互作用を国際関係の肝^{きも}として理解する（詳しくは、序章第1節を参照）。そして、そこに「われわれと他者」「格差と不満」「信頼と不信」「正統と異端」という鍵概念を当てはめ、国際関係を論じる。こういった4種類の鍵概念の提示は本書の核心で、特色である。

第3に、記述推論、因果推論、演繹推論という社会科学の方法を意識して説明する姿勢を貫いている（こちらも3つの推論の詳細については、序章を参照）。とくに日本語によるほかの国際関係論の教科書と比べ、方法論の意識化を促す姿勢は本書の特色である。

本書は2022年2月のロシアによるウクライナ全面侵攻の前に企画された。しかし、大半は侵攻後に同戦争の展開とともに書かれ、その影を読者は感じるだろう。著者は、ウクライナ戦争後の国際関係を論じるのに欠かせないと思われる基礎知識や重要な理論、論理を紹介することに注力した。本書が戦争の終結とその後の国際関係を考える上で役立てばと思う。そして、この本を読んで

はじめに

くださった読者が、これからの国際関係を論じ、その発展に関与してくださることを期待したい。先に示したように、本書は粗削りの作品で、未完成品である。みなさまからご批判を、できれば書いているものに基づいて建設的に、頂戴できるとしたら大変ありがたい。

本書は、きわめて恵まれた研究教育環境の中で生まれ、さまざまな方にご支援・ご協力をいただいた。前の職場である神戸大学大学院法学研究科と現在の職場である早稲田大学政治経済学術院の元同僚・現同僚の先生方、指導学生のみなさんから多くの刺激をいただいてきた。お名前をあげることはできないが、心より御礼申し上げる。くわえて、共同研究を通じ、たくさん学ばせていただいていた。これまたお名前はあげないが、共著者の先生・友人に感謝の言葉を伝えたい。なお、北海道大学の土井翔平さん、高知工科大学の三船恒裕さん、ワシントン大学の菊池柁慶さん、CROP-ITの内海春さんから原稿に詳細なコメントをいただいた。お名前を記して感謝を示したい。また、息子の湊・娘の紺夏が保育園時代からご指導いただいている巖剣修会の中尾哲先生をはじめとする先生方、ご関係のみなさまから多くの示唆を得て本書は書きあがった。御礼を申し上げる。剣道は戦略的相互作用の典型例である。巖剣修会の環境でたびたび思索することで本書の軸が定まり、全体の構想も固まった。湊や紺夏も自分たちが日々打ち込んでいる剣道に通じるものとして、将来どこかで国際関係論に興味を持ってくれることを願いたい。

最後に、故・山本吉宣先生にこの教科書をささげたい。願わくば、吉宣先生に本書を手にとっていただき、「僕、よくわからないけど」に続く、鋭いコメントを頂戴したかった。しかし、それはもう叶わない。今となっては、空の高みから、吉宣先生の直の師匠であり、著者も2002年から数年間をともに過ごさせていただいた故・J. D. シンガー先生とともに本書と僕たちを見守ってくださることを願うほかない。

多湖 淳

目次

はじめに

序章 国際関係論の学び方	1
1. 本書の射程と狙い	2
2. 記述推論	4
3. 因果推論	7
4. 演繹推論	9
5. 「ハード」なサイエンスとしての社会科学と国際関係論	14
6. 歴史理解の多面性	15

第 I 部 国際関係の原理と歴史

第 1 章 国際関係の基本原則	21
1. 国際関係——アナーキーと国際社会	22
2. 国際関係の基本原則と 4 つの鍵概念	23
3. 複数のアクターと戦略的相互作用	27
4. 典型的な相互作用としての囚人のジレンマゲーム	28
5. 2 つの大きなレンズ	32
第 2 章 国際社会の成り立ち	39
1. 文明と文明間関係——征服による統治と約束による統治	40
2. 中華国際秩序	41

3.	イスラム国際秩序	42
4.	近代西欧と現在の国際社会	44
5.	近代国家の成立原因をめぐるモデル——ティリーとスプラート	48
第3章	帝国主義と国際社会の民主化	53
1.	近代西欧秩序の成立と勢力均衡	54
2.	近代西欧秩序の拡大と植民地主義	56
3.	旧外交と新外交，第一次世界大戦	59
4.	国際社会の拡大と民主化	63
5.	国民と外交	64
第4章	ナショナリズムとグローバル化	71
	——今日の国際関係——	
1.	第二次世界大戦と国際連合	72
2.	国際連合とブレトンウッズ体制	75
3.	冷戦	77
4.	冷戦後という現在地	83
第II部 国際政治経済		
第5章	貿易とグローバル化	93
1.	国際貿易の歴史	94
2.	リカード・モデルと政治的な示唆	97
3.	生産要素モデルと政治的な示唆	100
4.	新貿易理論と新・新貿易理論	101
5.	モデルによる保護貿易支持の説明	102
6.	貿易をめぐる国際組織の役割と国家の行動	103

第6章	通貨と金融	111
	1. 国際通貨をめぐる歴史	112
	2. 多様な国際通貨政策の分布	115
	3. 国際金融のトリレンマと政治的な示唆	117
	4. 通貨危機にみる国家の行動	118
	5. 国際金融における非国家主体の存在感	119
第7章	貧困と開発援助, 人の移動と難民	123
	1. 貧困と開発援助をめぐる歴史	124
	2. 移民と難民をめぐる歴史	125
	3. 援助と移民・難民保護をめぐる政治力学	128
	4. 援助と移民・難民保護をめぐるジレンマモデル	131
	5. 援助と移民・難民保護をめぐる国際組織の役割と国家の行動	133
第Ⅲ部 安全保障		
第8章	国家間戦争と同盟・有志連合	141
	1. 戦争をめぐる歴史——戦争観・帝国主義・イシューの変化	142
	2. 抑止——軍拡と同盟・有志連合	145
	3. 安全保障のジレンマ	148
	4. フィアロンの合理的戦争原因モデル	150
	5. 3つの平和論	152
第9章	内戦とテロリズム	159
	1. 内戦をめぐる歴史	160
	2. テロリズムをめぐる歴史	164

- 3. 合理的選択モデルで考える内戦とテロリズム 165
- 4. 内戦への国際介入とその影響 169
- 5. テロリズムと名乗り 170

第10章 システムの安定と国家間の和解・関係修復 175

- 1. 国際システムの安定をとらえる研究の歴史 176
- 2. 覇権安定論, 国際制度による立憲的安定性, G7 177
- 3. パワー移行論 180
- 4. 国家間和解と関係修復 181
- 5. 敵と味方の境界線 184

第IV部 地球規模問題群

第11章 国境を越える環境問題と地球温暖化 195

- 1. 地球環境問題をめぐる歴史 196
- 2. レジームとグローバル・ガバナンスという考え方 198
- 3. 共有地の悲劇 203
- 4. 地球温暖化問題がつきつける国際関係の課題 204
- 5. 多国間交渉モデル 206

第12章 人権規範の広がりとの内政干渉 209

- 1. 国際人権問題をめぐる歴史 210
- 2. なぜ人権は守られないのか 213
- 3. 保護する責任という考え方 216
- 4. コンディショナリティという介入 217
- 5. 価値観の対立 218

第13章	技術革新と正統性の国際政治	225
1.	テクノロジーと国際関係をめぐる歴史	226
2.	核兵器, 地雷・クラスター爆弾	228
3.	自律型致死兵器システム	231
4.	パンデミック	233
5.	正統性の国際政治	234
終章	国際関係論の方法	241
1.	パズルか, クエスチョンか	242
2.	2つのイズムとコンストラクティビズム, ラショナルリズム	245
3.	社会科学としての国際関係論	249
	参考文献	253
	索引	261



コラム

コラム 0-1	アメリカの学問としての国際関係論	10
コラム 0-2	日本語と国際関係論	12
コラム 1-1	ゲームの展開型表記	31
コラム 1-2	繰り返しの囚人のジレンマゲーム	36
コラム 2-1	恋人（交渉）ゲーム	46
コラム 2-2	ユヴァル・ノア・ハラリの TED トーク	50
コラム 3-1	塹壕戦をめぐるゲーム	61
コラム 3-2	戦争とわれわれが他者に向けるまなざし	66
コラム 4-1	統合をめぐる交流モデル	80
コラム 4-2	ナショナリズムとサッカー	86
コラム 5-1	経済制裁	98
コラム 5-2	自由化と民主主義	106
コラム 6-1	直接投資と政治	115
コラム 6-2	直接投資と排外主義	119
コラム 7-1	世界の貧困の変化	129
コラム 7-2	難民の移動をめぐる政治学分析の例	134
コラム 8-1	民主主義の平和を説明するさまざまなメカニズム	153
コラム 8-2	民主的平和はなぜ生まれた？：女性の参政権と戦争忌避傾向	155
コラム 9-1	人為的国境と内戦	162
コラム 9-2	テロリズムと責任の所在	168
コラム 10-1	パワー移行をめぐる心理実験	182
コラム 10-2	集団謝罪の実験研究	188
コラム 11-1	地球環境問題と紛争	200
コラム 11-2	地球環境問題と NGO	205
コラム 12-1	人権 NGO の拡大とそれらに対する 2 つの抑圧	215
コラム 12-2	人権をめぐるデータ分析と新しい推定モデルの有効性	219
コラム 13-1	核兵器をめぐるタブー研究	230
コラム 13-2	安保理決議の正統性研究	237

コラム 14-1 核拡散をめぐる研究の最先端244

コラム 14-2 イズムをめぐる実験研究246

本書の使い方

本書は、大学の教科書として使用されることを念頭に書かれているが、独学にも使用できる。対象は学生だけではない。一般の方も国際関係論・国際政治学をひとりで学んでいただくことができる、「適切な学問への入り口」になるように書かれている。本書を通じて国際関係論・国際政治学が、みなさんがテレビ放送やSNSで触れるものと違い、理論と実証的な根拠に裏打ちされた深みのある社会科学であることを知っていただけたらと切に願う。

構成は、序章から終章の全15章立てになっている。大学では、主に「国際関係論入門」「国際政治学」といった講義名の授業で使っていただくことを想定している。大学では1学期15週の大学が基本だったが、14週を100分授業で行う大学も徐々に増えてきていると思う。その場合には、序章には本書の前提が書かれているので、初回授業で序章と第1章をあわせて進めることが想定できる（序章は予習課題としてもよい）。また、終章は方法論に関する応用性の高い内容で、必ずしも学部の講義型授業でカバーするべきものではない。よって、第13章までで講義を終え、試験を行い、その解説の時間に終章は手短かに紹介する程度でよい。

各章末には「要点の確認」を用意している。独学で読み進める場合には「要点の確認」で重要な論点を確かめるとよい。また、さらに先に進んだ学びを行うために、同じく各章末にある「文献ガイド」にしたがって推薦書籍を読み進めると、学びを一段階さらに深めることができるに違いない。なお、「文献ガイド」ではあえて日本語だけを選んでいる点は注意を喚起しておきたい。

※ 本書の一部は科学研究費補助金による研究(22H00050)の成果をもとに執筆されている。